

京 都 大 学 図 書



1820574880

総 合 人 間 学 部 図 書 館

189576



日文 701602167

講座 英米文学史

1

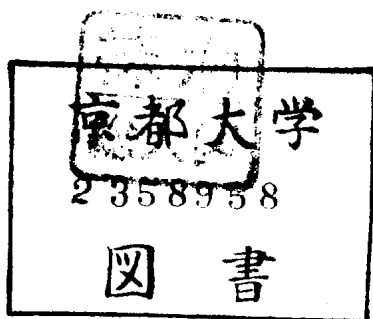
詩 I

I 中世英文学

松浪 有

II ルネッサンスの詩

御輿員三



大修館書店

411
522

著者略歴

まつ なみ たもつ
松 浪 有

1924年 大阪市に生まる
1945年 東京帝国大学文学部英文科卒業
1962—63年 ミシガン大学留学
1965年 文学博士（東京大学）
現 在 東京都立大学人文学部教授
主な著訳書 『英語史研究』（松柏社）、『英文法の問題点—英語の感覚』（Dennis Keene と共著）、
フリデソ 『動詞時制の歴史的 研究』（訳述・研究社）、レーマン 『歴史言語学序説』（研究社）、ブルンナー 『英語発達史』（共訳・大修館）など

おごし かず そう
御 興 員 三

1917年 広島県に生まる
1938年 京都大学文学部（英文学専攻）卒業
現 在 京都大学文学部教授
主 著 『イギリス文学—案内と文献』（研究社）、『ことばと詩』（あぼろん社）、『神と悪魔の間で—「楽園喪失」論』（あぼろん社）

講座 英米文学史 第1巻
詩 I

© T. Matsunami
K. Ogoshi 1977

1977年10月20日 初版発行

	責任編集	加 納 秀 夫
検 印	著 者	松 浪 有
省 略		御 興 員 三
	発 行 者	鈴 木 敏 夫

発行所 株式 大 修 館 書 店
会社

101 東京都千代田区神田錦町 3—24

電話 (03)294-2221(大代表) 振替 東京 9-40504

組版・印刷 大文堂 製本 三水舎
装幀 原 弘

目 次

I 中世英文学（松浪 有）..... 1

第 I 部 中世前期——古英語の文学..... 3

1. 序 説..... 3

1. 「中世」の意味 3

2. ゲルマーニアとローマーニア 5

3. アングロサクソン人 6

(1) ブリテン島征服 6

(2) アングロサクソン人の言語 7

(3) アングロサクソン人の社会 8

4. アングロサクソン教会の成立 10

(1) 教皇グレゴリーとオーガスティン 10

(2) アングロサクソン人の偶像崇拜 12

(3) アイルランド教会との葛藤 14

5. *Quid Hiniieldus cum Christo?* 16

2. 古英詩 18

1. 頭韻詩 18

(1) 頭韻詩 (Alliterative Poetry) の伝統 18

(2) 頭韻詩のリズム 24

i. 堅 琴 24

ii. ジーファースの韻律論 26

iii. ホイスラーの韻律論 31

iv. 結 語 37

2. 古英詩の表現	39
(1) 口誦定型 (Oral Formula)	39
(2) ヴァリエーション (Variation)	51
(3) 古英詩の用語	62
i. Snorri の詩論	63
ii. OE の詩語	68
3. 古英詩の主題	75
(1) 英雄詩 (Heroic Poetry)	75
i. 英雄時代 (Heroic Age)	75
ii. 英雄詩 (Heroic Poetry)	79
a. 英雄詩の伝統	79
b. 英雄詩のテーマ	81
c. <i>Beowulf</i> —歴史と民話	85
(2) 世俗歌 (Secular Poetry)	94
i. 哀歌 (Elegies)	94
ii. 格言歌 (Gnomic Poetry)	101
iii. 謎詩 (Riddles)	103
iv. その他	106
(3) 宗教詩 (Religious Poetry)	108
i. ケドモン風の詩 (Cædmonian Poems)	108
ii. キュネウルフとその詩風	112
a. Signed Poems	112
b. Cynewulfian Poetry	117
(4) 動物詩とアレゴリー	118
3. 古英語の散文	122
1. Anglo-Latin Literature	122
2. アルフレッド王	124
3. エルフリック	126
4. ウルフスターン	127
5. その他の宗教文学	127
6. ロマンスの先駆	128

第Ⅱ部 中世後期——中英語の文学..... 129

1. 序 説 129

1. 時代的背景 129

(1) ノルマン征服 (Norman Conquest) 129

(2) ノルマン王朝 (Norman Dynasty) 131

(3) プランタジネット王朝 (The Plantagenets)..... 133

(4) ばら戦争 (Wars of the Roses)..... 140

2. 社会的変革 142

(1) ギルドの成立 142

(2) 騎士道 147

(3) 教会の堕落 150

3. 文学的背景 152

(1) アングロ・フレンチ文学 (Anglo-French Literature) 152

(2) アングロ・ラテン (Anglo-Latin) 的背景..... 156

(3) ME とその方言 158

(4) 詩 形 160

i. 頭韻詩の伝統 160

ii. 新しい詩形 164

iii. スタンザ 168

2. ME の文学 I ——その伝統と発達..... 177

1. 中世英文学の連続性..... 177

(1) 説教文学の伝統 178

(2) *Ancrene Riwe* とその影響 181

(3) 知恵の文学と信仰の文学 185

i. 庶民の知恵の倫理 188

ii. 問答体の詩 191

iii. 宗教詩 195

2. ロマンズ (Romance) の誕生..... 197

(1) 'romance' の定義..... 197

(2) ロマンズの素材 200

i. 「フランスもの」 201

ii. 「ブリテンもの—特にイギリスもの」 203

iii. 「大ローマもの」 205

iv. その他のロマンズ 209

3. アーサー王伝説の起源と発達	212
(1) 年代記	212
(2) 円卓の騎士たち	215
(3) アーサー王伝説と ME のロマンス	218
(4) サー・トマス・マロリーと『アーサー王物語』	225
i. テキストについて	225
ii. サー・トマス・マロリー	226
iii. 物語について	227
4. その他の物語文学	229
5. MEにおける抒情詩の発達	230
(1) ヨーロッパ的背景	230
(2) ME の宗教的抒情詩	235
(3) ME の世俗的抒情詩	242
3. ME の文学 II——14, 15世紀の英文学	247
1. 散文文学	247
(1) 信仰と文学	247
(2) その他の散文作品	250
2. 14 世紀の詩人たち	251
(1) Pearl Poet を中心として	251
(2) <i>The Vision of William concerning Piers the Plowman</i>	260
3. ジェフリ・チョーサー —— 中世英文学の頂点	265
(1) その生涯	265
(2) チョーサーの作品	272
i. 習作から創作へ	273
ii. チョーサーの思想的背景	276
iii. 愛の詩	278
iv. 愛の物語	285
v. <i>The Canterbury Tales</i>	288
(3) チョーサーの周辺と後継者	290
4. 15 世紀の文学	293
(1) 散文文学の発達	293
(2) Ballads	296

II ルネッサンスの詩（御輿員三）..... 299

1. 序 論	301
2. ソネットについて	320
3. チャプマンの <i>Hero and Leander</i>	334
4. バジレインの家——スペンサー	347
5. ダイアナとフォーナス——スペンサー（続）	370
参考文献	385
事項索引	412
人名・書名索引	415

図 版 目 次

Frank's Casket	facing 118
ピーターバラ寺院：西側大柱廊	// 119
<i>The Anglo-Saxon Chronicle</i>	// 119
ワイアットの手稿	// 326
<i>The Faerie Queen</i> (1596版) 扉	// 327

I 中世英文学

松浪 有

はじめに

結果として、本篇では劇を除く中世英文学全般を扱うこととなった（劇は第5巻で扱う）。ということは、『詩 I』という標題にもかかわらず中世の散文文学をも含んでいるということである。いささか場違いの感否めないが、ほかに中世の散文を扱う適当な場所がないという現実的理由のほかに、ともすればそれが不当に軽視されがちな風潮に対する著者の抗議の姿勢と受け取っていただいてもよい。固有名詞の訳は、だいたい慣用に従わざるをえなかったが、そのため、いつものことながらやや不統一になることを避けえなかった。中世全般という広範囲のなかで、さまざまなジャンルを扱う以上、とんだまちがいや考え違いもかざらずあろうかと思う。大方の叱正を待ちたい。

本篇を完成するに当たって、いろいろな方面からの激励や御支援を賜わったが、そのうちで特にまずこのしごとを著者に与えてくださり、かつたえず御鞭撻くださった加納秀夫氏に心から御礼を申しあげたい。また、校正段階で一時眼をわくくした著者のために、校正刷全部に目を通していただき、幾多の有益なコメントを頂戴した同僚の忍足欣四郎氏にも深甚の感謝の意を表したい。最後になって恐縮であるが、大修館書店の川口昌男氏のたえざる御苦勞に対してはお詫びのことばも御礼のことばも見付からないほどである。これらのかたがたの激励と御支援がなければ、本篇はまだまだ日の目を見なかったことは、まちがいないからである。

著 者

第Ⅰ部 中世前期——古英語の文学

1. 序 説

1. 「中世」の意味

古代・中世・近代という、今日ではごく常識的になっている時代区分のうちで、「中世」(middle ages, *L. medium aevum*)ほどあいまい模稜としたものはない。近代になってイタリアの人文学者たちが使い始めたこの名称は、本来、失われたギリシア・ローマの古典時代と彼ら自身の時代の間で介在する時代という以上の意味を持っていたわけではなかったし、また、彼らの思想からしても、中世に高い評価が与えられていたはずもなかった。しかも、始めはかなり任意的に使われていたこの名称に対して、後世の歴史家たちがそれぞれの立場から年代設定を試みだして以来、問題はますます輻湊して、中世がいつ始まりいつ終わるかについては、今日なお諸説紛々の状態である。コンスタンチン (Constantine, 280?-377) の死から、ドイツやイタリアの近代国家の誕生に至るまで、すなわち、A. D. 377年から1500年までの約1100年間とする学校教科書的な定義がいちおう存在するが、今日でもこれに異を唱える歴史家も多い。

概していえば、問題はより多く、中世の終りの年代よりも、中世の始まりの年代にあるようである。そもそも、文芸復興 (Renaissance) と対比的な意味でこの用語を使った人文学者たちにとっては、中世の終り、あるいは近代の始まりの時期については、当然のこととして、かなりはっきりした意識を持っていたにちがいない。あるいは、多少立場が変わって、フランスやイギリスにおけるように、宗教改革 (Reformation) が中世と

近代の分れ目になるにせよ、中世の終りの時期が大きくずれるわけではない。¹⁾これに反して、中世の始まりの時期となると、その視点をどこに置くかによって、かなり違った年代が考えられそうである。言い換えれば、古代の終りの時期をいつにするかということでもある。この点については、それぞれの歴史家の立場によって、3世紀から6世紀に至る間の大きな歴史上の事件が規準とされるが、それらの見解のどれを取ってみても、ローマ帝国の実質上崩壊した時期の解釈によっていることは変わりない。しかし、これは、われわれの当面の問題の考察については、必ずしも都合がよいとはいえない。後に改めて考えることになるが、それらのローマ的尺度による規準が、ゲルマン民族の中世に限って考察する場合に、果たして妥当であるかどうかは、はなはだ疑わしいからである。

中世の評価についても、殊に19世紀以後においては、かなりの変遷があった。初期の低い評価の風潮は、その後も長く尾を引いて、別名暗黒時代 (Dark Age(s)) が暗示する通り、文化的に不毛の時代というレッテルが根強く残り、今日でも一般的にはその印象が完全に拭い去られたとはいえないかもしれない。中世について修正された評価が現われ始めたのは、19世紀における歴史学の発達のおかげであるが、その時でさえ、11世紀までは依然として暗黒時代、12世紀から文芸復興期または宗教改革の時期に至るまでを狭義の 'medieval age' として区別されていた。それは、とりも直さず、後者については固有の文化的価値を認めつつも、前者については、相変わらず文化的に非生産の時代という解釈が保持されていたことを意味する。しかし、今日では、中世前期についても再認識されつつあって、少なくとも専門的用語としては、暗黒時代という用語は、次第に廃用に帰しつつある。むしろ、歴史的証拠が乏しいという理由で、中世前期を 'dark' というならば、それはそれで意味がなくはないかもしれない。たしかに、中世前期は、その資料の乏しさのゆえに理解が妨げられることは否定できないからである。

1) しかし Trevelyan は、中世の終りを産業革命にまで下げる。Cf. G. M. Trevelyan, *English Social History*, p. 96.

2. ゲルマーニアとローマーニア

このような「中世」のあいまいさのなかで、さしずめわれわれが直面する問題は、イギリスの中世をどのように理解するべきかということであろう。その理解なくしては、「中世英文学」を理解することもまた不可能だからである。

いうまでもないことであるが、いわゆる中世人が、みずから生きた時代を、今日一般に区別される「中世」として意識したわけではなく、そのはずもなかった。それどころか、特にゲルマン民族の場合、かなり後に至るまで、古代と彼ら自身の時代の間に断絶を感じることもなかった。9世紀に書かれたノーサンブリアの王朝の系譜を見ると、その先祖はたいていウォーデン (Woden) にたどりつく。¹⁾ *Beowulf* (『ベオウルフ』)、または他の英雄詩の断片が、イギリス以外の土地を舞台とし、登場人物のすべてがゲルマン民族の他の種族に属するからと言って、それらの作品が、異教時代の伝承をアングロサクソン人がそのまま受けついだものと考えする必要もなければ、またそれらの改訂版であると考えする必要もない。1世紀の人タキトゥス (Tacitus, 55-118?) が伝えるところの、ゲルマン人の首長に仕える従者 (comitatus) の倫理は、英雄詩の登場人物には勿論のこと、*Anglo-Saxon Chronicle* (『アングロサクソン年代記』) に現われる8世紀のウェセックス (Wessex) 王キュネウルフ (Cynewulf) の従者たちにも、10世紀にモールドン (Maldon) の戦いに破れた老将ビュルヒトノース (Byrhtnoth) の従者たちにも当てはまるのである。

フランク人 (Franks) などのように、早い時期に完全にラテン文化に同化してしまった大陸のゲルマン民族は別として、特に北海沿岸民族は、全体が1つの文化的共同体をなしていたと考えられ、それは地理的・種族的境界をも越えたものであった。恐らくはイギリス最古の詩と思われる *Widsith* (『ウィードシース』) に挙げられる英雄たちの時代と分布は、それを象徴的に表わしたものであるが、時代は下って9世紀のウェセックス王エゼルレッド I (Æthelred I, d. 871) を訪れたアイスランドの吟唱詩人 (skald, ON skaldr) グンラウグ (ON Gunlaugr) は、宮廷において

1) Cf. Henry Sweet (ed.), *The Oldest English Texts*, pp. 170-71.

即興の詩を朗読して賞讃されたことが *Gunlaugs Saga Ormstungu* (『へび舌のグンラウグ物語』) に見えている。もちろん、このような北海ゲルマン民族共同体も次第に変容して行った。

古代末期にローマ帝国に侵入した異民族は2つあって、1つはアラブ民族、他の1つはゲルマン民族であったが、両者の根本的な差は、前者がラテン的世界に融和しなかったのに反して、後者は易々としてこれに同化した点にあった。¹⁾ すなわち、ゲルマン民族がゲルマニア (Germania) を解体して、ローマニア (Romania) に融合して行く過程がゲルマン民族の中世であったといえる。殊に、ラテン化のおくれた北海ゲルマン民族については、それぞれ固有の民族的、文化的条件があって、そのためにラテン化の過程と程度に差が生じ、それがその後の国民性の差を形成していった。アングロサクソン人の場合、2つの重要な契機があって、1つはキリスト教への改宗であり、他の1つはノルマン征服であるが、それらの考察に移る前に、まずアングロサクソン人自身について明らかにしておかねばならない。

3. アングロサクソン人

(1) ブリテン島征服

ビード (the Venerable Bede, 673?-735) が *Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum* (『イギリス国民教会史』) において述べているところによれば、²⁾ 北方の蛮族に悩まされていたブリトン人 (Britons) の王ヴォーティガン (Vortigern, Uurtigern) は、海のかなたのアングル人またはサクソン人 (*Anglorum sive Saxonum gens*)³⁾ に助けを求め、449年、彼らは3隻の軍船に乗って到着し、ブリトン人の外敵に当たる条件で居住を許された。始めは、敵を打ち破ったが、やがて大陸よりさらに多くの仲間を呼び寄せ、ついには却ってブリトン人を滅ぼすこととなった。これらのゲルマン人は、サクソン人 (Saxons)、アングル人 (Angles) およびジュート人 (Jutes) から成り、この3種族を総称して、今日アングロサクソン人と呼

1) Cf. E. R. Curtius, *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*, p. 34.

2) Charles Plummer (ed.), *Venerabilis Baedae Opera Historica*, pp. 30-32.

3) ビードは、ここではアングロサクソン全体を、無差別にこう呼んでいるが、次に述べる3つの種族を始めて指摘したのも彼である。

んでいる。始めにやって来たゲルマン人の首長は、ヘンゲスト (Hengest) とホルサ (Horsa) と呼ぶ兄弟で、彼らの祖先もまた、ウォーデンにまでさかのぼる。Anglo-Saxon Chronicle によれば、ヘンゲストの息子エッシュ (Æsch) は、488年にケントの王位についている。

アングル人、サクソン人、ジュート人の大陸の故郷については、いろいろ説があるが、ビードの記述 (De Saxonibus, id est, ea regione quae nunc Antiquorum Saxonum cognominatur, ...) の他に、考古学的史料からも比較的确实なのはサクソン人の故郷で、だいたいホルスタイン (Holstein) 地方であることが判っている。アングル人の故郷を、ビードは 'Angulus'¹⁾ と言っていて、あるいはシュレズウィヒ (Slesvig) 地方であると言われるが、いずれにせよ3種族のうちでもっとも北方に住んでいたらしい。もっとも不明確なのは、ジュート人の故郷で、地名からしてジャットランド (Jutland) に帰するのは、早計であって、ラインランドのフランク人との関係の考えると、受け入れがたい。

ブリテン島に定住したのちのアングロサクソン人は、いわゆるアングロサクソン七王国 (Anglo-Saxon Heptarchy) を打ち建てた。

ジュート人 ケント (Kent, OE Cent)

サクソン人 { エセックス (Essex, OE Ēast-Seaxe)
ウエセックス (Wessex, OE West-Seaxe)
サセックス (Sussex, OE Sūþ-Seaxe)

アングル人 { 東アングリア (East Anglia, OE Ēast-Angle)
マーシャ (Mercia, OE Mierce)
ノーサンブリア (Northumbria, OE Norþ-hymbre)

のちに、古英語でアングロサクソン人全体をさして Engle (L Angli) と言い、11世紀になると、国全体を 'Engla land' と呼ぶようになったが、その理由ははっきりしない。アイルランド語では、イギリス人全体をサクソン人の名で呼んでいる (Ir Sassanach, Sacsnoch, Gael sassunnach)。

(2) アングロサクソン人の言語

今日古英語の名で総称されるアングロサクソン人の言語は、種族によっ

1) Angles (L Angli) の名は、ここから生じた。

て、3つ、または4つの方言に分かれる。

ジュート人——ケント方言 (Kentish)

サクソン人——ウェストサクソン方言 (West Saxon)

アングル人——アングリア方言 (Anglian)

{ マーシア方言 (Mercian)
{ ノーサンブリア方言 (Northumbrian)

これらの方言差が、大陸時代からすでに存在したものかどうかは疑わしい。むしろ、ブリテン島へ移住したのちに、その差がいちじるしくなったと考えるべきであろう。¹⁾

今日に伝わる古英語の文献は、ほとんどすべてが、ウェストサクソン方言で書かれている。その原因の1つは、8世紀末以降のスカンディナヴィア人の侵寇によって、テムズ川以北の修道院が破壊され、そこに蔵されていた文献が消失してしまったことによる。現存する古英語の詩の大部分が、ヴェルチェリ写本 (Vercelli Book)、エクセター写本 (Exeter Book)、ジュニアス写本 (Junius Manuscript)、ベーオウルフ写本 (Beowulf Manuscript) に収められているが、これらの写本はいずれも10世紀以降に写されたもので、ウェストサクソン方言がだいたい基調になっている。しかし、作られた年代はもっと古く、またその場所もウェセックス以外であることは内的・外的証拠によって判明している。恐らくは、アングロサクソン人が愛した大部分の英雄詩は永久に失われてしまったにちがいない。古英詩に比べると、古英語の散文はほとんど完全な姿で残っている。そもそも、古英語の散文が現われたのは、ウェセックス王アルフレッド (Alfred, 849-99) の功績によるもので、それがウェストサクソン方言で書かれていたとしてもふしぎでない。しかし、それ以後の作品も、時と場所とにかかわらず、ウェストサクソン方言で書かれているところから判断して、10世紀以後は、それが古英語における標準的文語となっていたと考えられる。

(3) アングロサクソン人の社会

アングロサクソン人の初期の社会制度は、ゲルマン民族共通の形態を示

1) Cf. David De Camp, "The Genesis of the Old English Dialects: A New Hypothesis," *Language* 34, pp. 232-44.

していて、少なくとも歴史時代に入ってからには、父系制度であったと考えられる。

国ないし民族の元首は、いうまでもなく王 (OE *cyning*) であって、王家の祖先をたどれば、遠くウォーデンにまでさかのぼる。いったん戦いが生じると王は絶対的な支配者となった。王位の継承は、いちおう世襲制ではあったが、それには種族の意見の代表機関である賢人会議 (OE *witena-gemōt*) の賛意を得ることが必要であった。この制度は、ノルマン征服までずっと続いている。

初期におけるアングロサクソン人の社会には2つの階級があって、1つはその祖先がマンヌス (Mannus) にまでさかのぼるもので、古英語で '*eorlas*' と呼ばれる武士階級であるが、彼らの任務は戦場で争うことであって、王に対する忠誠は絶対的なものであった。先にふれたように、タキトゥスのいう '*comitatus*' の倫理は、アングロサクソン人の '*eorlas*' についても当てはまる。その下に '*eorlas*' と呼ばれるものがあり、これが労働者階級であり、農耕・狩猟・牧畜・冶金などに従事していた。彼らは、今日の '*churl*' が意味するほど悪い意味はなく、少なくとも奴隸とは区別されていた。時には戦場で戦うこともあって、それによって地位が向上し、下級の '*eorl*' になることもあった。

これらの階級的区別は、現実的に貨幣によって換算することができた。たとえば、ある人間が他の人間によって何らかの害を受けた場合、加害者は被害者に一定の金額を支払わねばならない。いわゆる '*wergild*' である。これは、身分によってその額が異なり、また、同じ階級に属するものでも、家柄によってその額に差があった。この点で、現代社会における貨幣の通念とは全く異なり、それは人間の価値の物質的象徴としての意義が大きかった。この精神は、後に述べるように、王と *comitatus* の間の、または、武人同士の間の倫理にもっともよく表わされる。

シーザー (Caesar, 100-44 B.C.) やタキトゥスが高く評価しているように、ゲルマン人の社会を通じて結婚制度は厳格であるが、しかし女性が古英語の歴史や文学に名を現わすことはまれであって、王妃であるか教会に属する女性に限られている。